



# 学生アイデアコンテスト2025

## 開催レポート



特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター（JANIC）

## はじめに

JANICでは、社会課題の解決に挑む次世代の担い手を発掘し、その挑戦を後押しすることを目的として「学生アイデアコンテスト」を例年開催しています。**3回目** の実施となった2025年の成果をレポートします。

## 応募概要と今年の特徴

応募期間：6月～8月末（約3か月間）

応募数：**127件**

審査員：3名による厳正な審査

### テーマ

「あなたが関心を持つグローバルな社会課題は？  
その解決に向けて、どんなアクションを起こしますか？」

**今年の特徴：**応募フォーマットに実現までのステップ・スケジュール・必要な予算感なども記入する形式を採用したことです。そのため、例年以上に「実行可能性」や「社会実装」を意識した具体的な提案が多く寄せられました。

**提案分野：**労働・ジェンダー・教育・平和・移民・環境・テクノロジーなど多様な分野が含まれ、学生たちが自らの視点で社会課題と向き合い、未来を構想した内容が目立ちました。

**選考結果：**厳正な審査の結果、審査員3名とともに議論を重ね、最優秀賞・アクション賞・アイデア賞のほか入賞6組を選出しました。

✓ 入賞作品一覧はこちら（11/14公開予定）：

<https://janic-ideacontest.jp/>

# グローバルフェスタJAPAN2025での成果発表

開催日：9月28日

会場：新宿住友ビル三角広場

主催：外務省・JICA・JANIC共催

総来場者数：**約3万人**（来場・オンライン合計）

なお、当時は本コンテストの成果発表および派生企画として、来場する多くの若者層にリーチするよう、学生を対象とした以下の3企画を実施しました。

## ① 表彰式「未来を変えるのは、このアイデア！」

**27名** の観客が見守るなか開催された表彰式では、審査員から講評が述べられたあと、各賞の発表と表彰が行われました。最優秀賞・アクション賞・アイデア賞の3組はステージ上でプレゼンテーションも実施。入賞6組にも賞状が授与されました。

## 受賞者

賞	氏名・団体	作品タイトル
最優秀賞	亀山 杏佳	やさしい日本語で守る労働者の安全 ～言葉の壁から命を守る仕組みづくり～
アクション賞	加藤 里桜	EmpowerHer（エンパワー・ハー）
アイデア賞	QUACC	QUACC

作品パネルは、フェスタ会場内にも掲示され、多くの来場者の目に触れました。





(上) 最優秀賞 龜山さん (中) アクション賞 加藤さん (下) アイデア賞 QUACC 吉良さん

## ② ワークショップ「写真から発見社会課題 アイデアワークショップ」

社会課題をアートで発信するチーム LITTLE ARTISTS LEAGUE のルミコ・ハーモニー氏を講師として迎え、国際協力の現場を伝える外務省フォトコンテストの過去受賞作品を教材に、参加者 **23名** が「写真から見える課題」「自分にできるアクション」を話し合いました。

課題の背景や当事者の視点に思いを馳せ、国際協力に向けて“自分が今日からできる小さな一歩”を考える時間となりました。



講師のルミコ・ハーモニー氏



(上) 23名の若者が参加 (下) 写真を見ながら議論する参加者

### ③ ステージ企画「—未来を動かす学生たちの挑戦！—NEXT PLAYERS アクションピッチ」

国際協力に取り組む学生団体3組が、自分たちの活動や今後の構想を発表。NGOや企業の立場から社会課題解決に取り組むゲストとの対話を通じて、具体的な助言や新しい視点を得る機会となりました。

約70名

会場来場者

約80名

オンライン視聴者

学生たちの熱意のこもったプレゼンテーションに対し、多くの応援コメントが寄せられました。

#### ■ 当日の動画はこちら

- ・グローバルフェスタ公式サイト：<https://gfjapan2025.jp/>
- ・YouTube：<https://www.youtube.com/watch?v=ONeSEsiteJ0>



(左) 鬼丸昌也氏 (中央) チャンゴックジエン氏 (右) 門田瑠衣子氏



(左) GPTY (中央) ALPHA (右) 東京情報デザイン専門職大学 の皆さん



司会の囲碁将棋・文田大介氏



大勢の観客の応援

## おわりに — 若者たちの挑戦を未来につなぐ

今回のコンテストと成果発表を通じ、若者たちの「気づき」「想い」「希望」「行動への意志」が、確かな言葉と形となって表現されました。彼らの姿は、来場者や視聴者にも大きな刺激と勇気を与えるました。

JANICは、こうした挑戦を一過性で終わらせず、次につながる機会として広げていくため、今後も伴走してまいります。

最後に、本事業にご支援・ご協力くださいました全ての皆さんに、心より感謝申し上げます。

